

# 論文

## 1 人称代名詞の言語化・非言語化の意味

——客体的事態解釈と主体的事態解釈——

山本雅子

### 要旨

従来の言語研究では、話題化された「私は」が言語化されない場合、ここでは「私は」が省略されているとみなされている。しかし、話題化された「私は」の非言語化を〈省略〉という用語で説明することは適切ではない。非言語化された文と、言語化されていないところに「私は」を補った文とでは、その文の果たす意味役割が異なるからである。言語化・非言語化の非対称性は、言語表現を言語主体の認知プロセスの反映とみなす認知言語学のアプローチからいえば、「際立ち」の非対称性を反映する。言語化された代名詞は、非言語化された代名詞との関係において、相対的に際立っているのである。本稿ではこの「際立ち」の非対称性がみせる言語現象を言語主体の事態解釈の観点から考察し、話題化された「私は」の言語化・非言語化の非対称性が、事態を客体的に解釈するか、主体的に解釈するかという、言語主体の事態解釈態度を示す認知プロセスの非対称性の反映であることを説明する。

キーワード：主体的解釈 客体的解釈 省略 グラウンディング  
ランドマークとトラジェクター

### 1 問題の在処

日本語は主語が省略されることの多い言語であるといわれている。次の例を見てみよう。

(1) A: 3年ぶりに村上春樹の新作がでるんだって。前評判、凄いよ。

B: その本、早く読みたいなあ。

(1)はAとBの対話である。「その本、早く読みたいなあ。」は村上春樹の作品が大好きなBの発話である。単独の文として成立しているものの、その経験主体「私は」が言語化されていない。つまり、いわゆる主語が言語化されていないのである。このような場合、従来の言語研究では、主語が〈省略〉されているという。

しかし、Bに主語が言語化されていないことは、果たして、主語が省略されていることを意味しているのだろうか。「省略」とは「簡略にするために一部分を略してはぶくこと」(『広辞苑』第5版)である。(1)の「その本、早く読みたいなあ。」を主語の省略とみなすならば、簡略な部分を補って「私は」を挿入した(2)が成立しなければならない。

(2)\* A: 3年ぶりに村上春樹の新作がでるんだって。前評判、凄いよ。

B: 私はその本、早く読みたいなあ。

しかし、実際のところ、(2)の対話は成立しない。つまり、全く同一の状況において、「その本、早く読みたいなあ。」は成立するが、「私はその本、早く読みたいなあ。」は成立しないのである。となると、(1)Bの「その本、早く読みたいなあ。」は、主語「私は」が省略された形式であるとはいえないことになる。では、そもそも日本語には「私は、その本、早く読みたいなあ。」という文が存在しないのかといえば、そうではない。(3)では、主語「私は」を挿入した文が明確に意味を成している。

(3) A: これ、この間、出た村上春樹。田中さんに貸してあげようと思ってるんだ。何か新しい小説が読みたいって言ってたから。

B: 田中さん、読みたがるかなあ。だって、村上春樹、あまり好きじゃないって言ってたから。でも、私は、その本、早く読みたいなあ。

では、「その本、早く読みたい。」と「私は、その本、早く読みたい。」が示す、話題化された1人称代名詞の言語化・非言語化という形式上の非対称性は、何を意味するのだろうか。言語表現の意味を言語主体の事態解釈の反映とみなす認知言語学の立場からいえば、形式の違いは、認知主体が事態を解釈する際の解釈態度の差異を反映しているとみなされる。本稿では、話題化された1人称代名詞の言語化・非言語化の非対称性が意味することを、言語主体の事態解釈の観点から考察し、両者の非対称性の意味を明らかにする。手続としては、まず、言語表現の意味を認知主体の概念化の観点から考えるとどのようなことなのかを簡潔に説明し、話題化された1人称代名詞「私は」が言語化される場合と非言語化される場合の意味の非対称性を、3人称代名詞の言語化・非言語化と対照しつつ考察する。

## 2 概念化と言語表現の意味

「認知言語学のアプローチでは、言語現象が、言語主体の環境との相互作用として身体的経験に動機づけられているという経験基盤主義の言語観を背景にしている。」(山梨2009: 273) ここでは、話題化された「私は」の言語化・非言語化の意味を経験基盤に基づいて規定していくために必要となる基本的な概念を説明する。

### 2.1 概念原型

認知意味論では、言語表現の意味は、静的な「概念 (concept)」というよりはむしろダイナミックな「概念化 (conception)」として捉えられる。このダイナミズムは、概念化が究極的に認知<sup>1)</sup>プロセスそのものであり、その処理時間を介して明らかになっていくことからくるものである。概念化は、脳内で生じているという意味では内的であるといえるが、同時に、われわれが常に世界のある側面を概念化していることを考え合わせると、むしろ世界と関わりあうための心的領域における手段としてみなされるべきもの<sup>2)</sup>であり、心的経験のあらゆる側面を包含するといえる。このような観点から、概念化は次のように広く定義されている。「(1) 新奇で、創り出された概念 (conception) も概念化であり、(2) 「知的」観念のみならず、感覚経験、運動経験、感情経験も概念化であり、(3) 物理的文脈、言語的文脈、社会的文脈、文化的文脈の把握も概念化であり、(4) 処理時間を介して展開していく概念 (conception) の概念化である。」(Langacker 2008: 30)

概念化のダイナミックな性質を明確に記述するため、認知言語学では、イメージ能力を重視した記述がされている。イメージに基づくアプローチでは、単純な概念を構成する要素を用いて複雑な構造を正確に表示することが可能であり、心的経験の本質をより直接的に反映できるとみなされるためである。最もよく知られている記述は、イメージ・スキーマを用いた記述である。イメージ・スキーマとは、日常の身体経験から抽出された、特に視覚、空間、動き、力などに関連するスキーマ化されたパターンであり、ある特定のドメインのなかでこれ以上何にも還元することのできない最少の概念 (minimal concept) を表すスキーマである。言葉を換えていえば、イメージ・スキーマは、基本的に「概念以前」の存在として捉えられるべきものであり、合成と比喩的投射を媒介し、より精緻化されより抽象化された概念を作り出す概念の骨組みである。

イメージ・スキーマのうち、日常生活において非常に使用頻度が高く、基本的であり、身体経験に根ざした概念を、概念原型 (conceptual archetypes) という。たとえば、物理的な物体、ある場に位置する物体、空間を移動する物体、人間の体や顔、全体とその一部、物質としての容器とその中身、何かを見ること、何かを持つこと、誰かに何かを渡すこと、意図し

た変化を生じさせるために力を働かせることなどがある。概念原型は、基本的であり人間の初期の発達段階において一貫した概念的なゲシュタルト<sup>3)</sup>として理解されている。

## 2.2 ステージ・モデル

概念原型の一つに、外部世界をどのように解釈するかを説明するステージ・モデルがある。ステージ・モデルという用語は、われわれが対象を解釈する過程が、劇を見るという事態の特殊事例と見なせることからきている。何かを見るとき、われわれは外部世界に存在するすべての事物を一時に見ることは不可能である。世界を見る場合には、必ず何かに注目し、焦点化していくプロセスが必要となる。最大限に広げられた視野の中から、ある限られた領域だけを注意が向けられる領域として選択し、この限られた領域内の特定の要素に注目して焦点化するのである。このような事態解釈の仕方は、劇が行われているステージに目を向け、そのなかに在る俳優や小道具に注目することに似ていることから名付けられたモデルである。ステージ・モデルは、より一般的には図1のような知覚行為の状況を規定する認知図式の種類とみなすことができる。Vは対象を知覚している観察者 (viewer)、Pは知覚対象 (perceived object)、PFは最大限に広げられた視野 (perceptual field)、OSは注意が向けられるある限られた領域 (on-stage) を意味する。

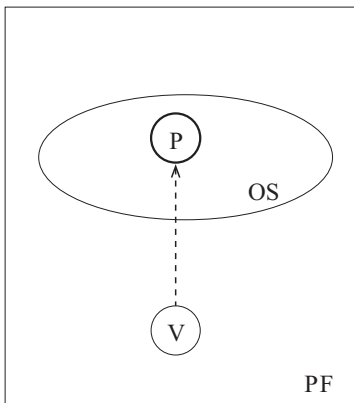


図1

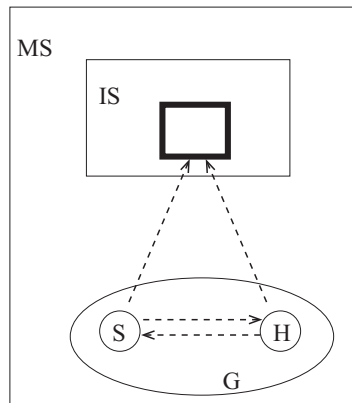


図2

(Langacker 2008: 261)

ここで重要なのは、この知覚行為と概念行為とのあいだに見られる平行性である。知覚行為における焦点化のプロセスに対応するのが概念行為における概念化のプロセスであり、それを言語として表示するかという概念内容の選択と、選択された概念内容の何を前景とし何を背景として比喩的に記述するかという選択を意味する。まず、一般的な状況や与えられた状況のなかで、言語表現が規定するある特定のまとまりの認知ドメインへのアクセスが最初

に選択される。次いで、アクセスされたドメインにおいて、ある言語表現が扱う「範囲」の広さが選択される。ドメインのどの部分が言語表現が表す意味の概念基盤として実際に喚起され使用されているのかの選択であり、ドメイン内でその言語表現が扱う範囲、つまりスコープが規定される。このスコープの規定は前景化と背景化<sup>4)</sup>を介して決定される。ある言語表現の解釈に際し、ドメインにおけるスコープの範囲が最大の場合（最大スコープ）と、直接関係している部分（直接スコープ）に限られる場合がある。後者の場合、直接スコープは最大スコープに対して前景化されているという。

概念行為を表す基本スキーマは、図1と平行関係にある図2として提示されている。直接スコープ (IS: immediate scope) は、知覚行為のオンステージ領域 (ON) に対応し、同様に、最大スコープ (MS: maximal scope) は最大視野 (PF), ある表現のプロファイルは注意の対象 (P) に対応する。そして、観察者 (V) に対応するのがグラウンド (G) である。基本的にはグラウンドは、話し手 (S) と聞き手 (H) と、発話の文脈における話し手・聞き手の相互作用からなる。概念化の表出である言葉の意味には概念化の主体である話し手と聞き手がともなう。そのため、あらゆる言語表現の意味に、少なくとも最小限度はグラウンドが関与しているのである。破線の楕円が、最小限度のグラウンドの存在を示している。破線の矢印は注意の方向を表し、その傾注方向には異なる2つの経路がある。第1の経路は、発話における相互作用を構成するものとして、対話者どうしが注意を向け合う双方向である。第2の経路は、対話者たちが、オンステージに焦点化された事物、すなわち言語表現が備えるプロファイルに向ける注意である。

### 2.3 規範事態モデルとコード化

知覚行為を表すステージモデルが示す「観察者」と「観察されている状況」の全体的な関係のことを〈視点配置〉という。知覚行為と平行関係にある概念化行為では、観察者は言語表現の意味を理解する概念化者である話し手と聞き手となる。ある特定の視点の配置には、ほぼ間違いなくデフォルト状態が規定されているのであり、デフォルト視点配置において話し手と聞き手は、定められた場所から周りの世界で起こる実際の出来事を観察し記述する。このようなデフォルト視点配置を備え、おそらく最も典型的であると見なされるタイプの出来事を理解するための、発話事態それ自体に係わる概念原型を規範事態モデル (canonical event model) と呼ぶ。

事態を考える際に最小限必要となる構成要素は、事態の「参与者」とそれらの間の関係であり、典型的な出来事とは、図3(a)に見られるように動作主 (AG) が被動作主 (PAT) に何らかの働きかけを行い、それによって被動作主に何らかの状態変化が生じるという、力を介した有界的な事態である。この種の事態は、直接スコープ (オンステージ領域) 内の注意

の焦点であり、その中に入り込んでいない観察者 (V) によって、オフステージから理解される。このすべてがこの状況全体を包括するセッティングの中で展開されている。

規範事態モデルが実際の言語構造とどのように関連づけられているかを指す用語をコード化 (coding) という。たとえば、焦点化された参加者が2つ存在する他動詞節は、プロトタイプとして働くこの種の事態をコード化する一般的な方法である。図3 (b) は、この他動詞節におけるデフォルト的なコード化の方法を示している。グラウンドはオフステージの観察者と同じである。動作主-被動作主の相互作用はオンステージに描かれ、動作主はトラジェクター<sup>5)</sup>、被動作主はランドマークとしてプロファイルされている。「特に認知文法では、主語/目的語関係は、トラジェクターとランドマーク配列の文法的な現れとして主張されてきている。主語は、プロファイルされた関係におけるトラジェクターをコード化する名詞句、目的語は、そのランドマークをコード化する名詞句である。」 (Langacker *ibid.*: 478)

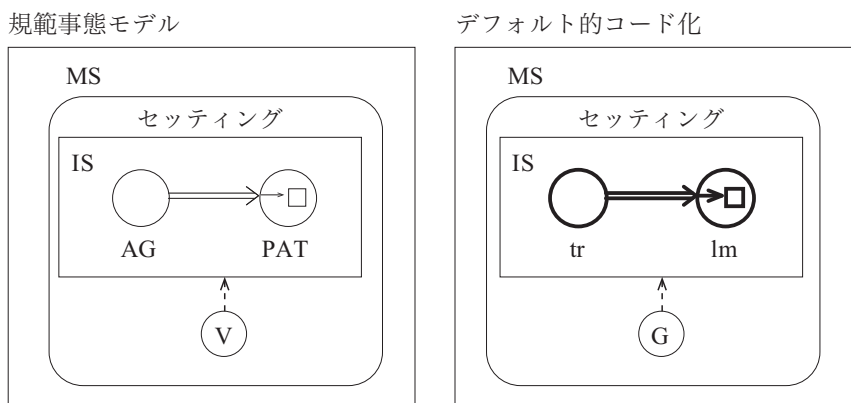


図3 (Langacker *ibid.*: 466)

### 3. 1人称代名詞の非言語化の意味

ここでは、2節で説明した概念を用いて、1人称代名詞の非言語化の意味を考える。まず、3人称代名詞の構図から〈省略〉の認知的意味を考える。そして、この省略の認知的意味と1人称代名詞の非言語化の認知的意味の相違を考察する。

#### 3.1 3人称代名詞の言語化・非言語化の意味

##### 3.1.1 3人称代名詞の構図

先行詞と3人称代名詞との関係には、参照点とターゲットの探求プロセスが反映されてい

## 1 人称代名詞の言語化・非言語化の意味

る。一般にわれわれが何かを探求する場合、そのターゲットに到達するために参照点（すなわち、ターゲットに到達するための指標としての間接的な手掛かり）を認知し、この参照点を経由して、問題のターゲットとしての対象を認知していく。この種のプロセスは、基本的に図4のように規定される。

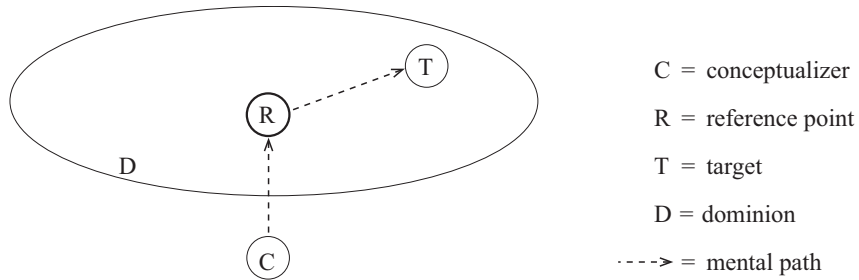


図4

(Langacker 1993: 6)

図4のCは認知主体 (conceptualizer)、Rは参照点 (reference point)、Tはターゲット (target)、楕円形のサークルは (D) は、参照点によって限定されるターゲットの支配領域 (dominion)、破線の矢印 (----->) は、認知主体が参照点を経由してターゲットに到達していくメンタル・パス (mental path) を示す。参照点とターゲットの認知プロセス自体は、言葉の問題ではなく、認知能力にかかわる問題であるが、先行詞と3人称代名詞との関係はこの種の認知プロセスによって説明される。

先行詞と3人称代名詞の話題化と照応の関係を、山梨 (2004) では図5に規定して次のように説明している。(以下の例では、サブスクリプト (i.e.  $i$ ) でマークされる先行詞と代名詞は、基本的に照応関係にあることを示す。) 図5のRは、文頭に前置された先行詞としての名詞句 (「いま話題のヒラリー婦人」)、Tでマークされているボックスは先行詞を叙述する後続の命題、この命題内のサークル (○) は先行詞と照応関係にある代名詞 (Pro) に対応する。ボックス内のサークルから右方向に延びる矢印は、命題にかかわる何らかの行為の力を示すものとする。また、先行詞のRと代名詞のサークルを結ぶ点線は、認知主体Cが照応的に両者が同一指示の関係にあると認識していることを示している。命題内のサークルは、先行詞の名詞句と問題の命題を結びつけるいわばピボットとして機能する。このピボットにより、話題となっている先行詞の名詞句を、後続の命題によって叙述することが可能になる<sup>6)</sup>。

(4) いま話題のヒラリー婦人 $i$ 、彼女 $i$ はスキャンダルで苦しむ夫をよく支えてきた。

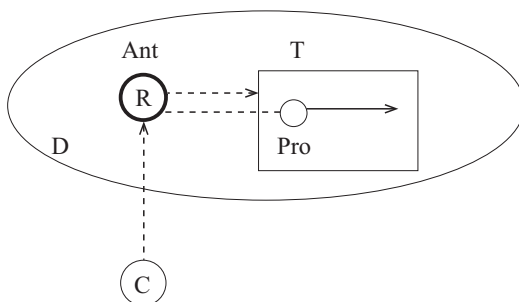


図5

(山梨2004: 132)

先行詞を参照点としてターゲットを探求するプロセスを反映する3人称代名詞の認知構図は、ステージモデルでいえば、3人称代名詞が言語化される背景には観察者がオフステージに存在し、観察者と対象とのあいだに距離が存在していることを意味する。この距離こそが観察者が対象を客体解釈していることを示しているのである(3.2.1参照)。このような3人称代名詞の客体性について、バンヴェニスト(1983)は「話(discours)<sup>7)</sup>の言表のなかには、その個人的な性質にもかかわらず、人称の条件から免れているもの、つまりそれ自体ではなく、ひとつの《客観的》状況に関係するものがある。それが《3人称》と呼ばれているものの領域なのである」(ibid: 239)として、3人称の特質を「話(discourse)の現存のなかで、その現存自体に関係するのではなく、その現存の外にあるだけか、あるいはなにか——このだけか、あるいはなにかはいつでも、1つの客観的な指向を備えていることが可能である——の過程に述辞としてはたらくのにとっての唯一の可能な言表行為様式なのである。」(ibid: 239)と述べている。この客体性については、3.2.1グラウンディングのところで詳しく説明する。

### 3.1.2 省略の意味

参照点とターゲットの探求プロセスを反映する先行詞と3人称代名詞の関係は、複数の文から構成される談話レベルにおける先行詞と3人称の関係を次のように説明する。

(5) 昨年ノーベル賞を受賞した経済学者が京都を訪れた。彼は、複雑系のパラダイムに基づく経済理論の提唱者として注目されている。また、{彼は<sub>i</sub>/( $\varphi$ )<sub>i</sub>} 政治運動家としても知られている。{彼は<sub>i</sub>/( $\varphi$ )<sub>i</sub>} また愛妻家でもある。(山梨 ibid: 132)

この例では、最初の文の主語が、談話の展開のための話題として1次的な焦点の機能をにない、これを参照点として、この参照点と照応的に呼応する代名詞を含む後続文の命題群がターゲットとして起動されている。



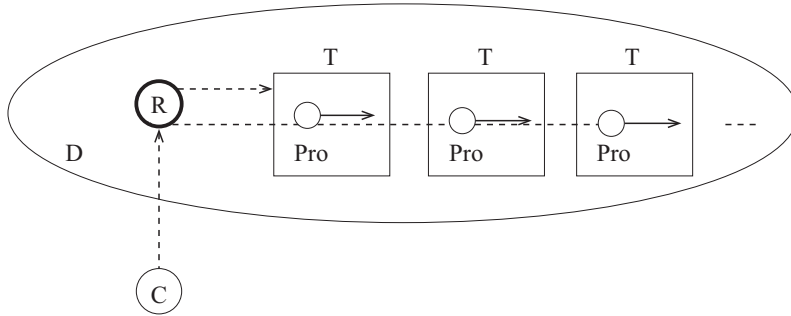


図6

(山梨 ibid: 132)

参照点構造の観点からみた場合、談話レベルの話題化がかかわるこのタイプの照応関係は、次のように規定される。図6のRは、最初の文において先行詞としての機能をなす主語（「昨年ノーベル賞を受賞した経済学者」）、Tでマークされている複数のボックスは、この先行詞を叙述する後続の（ターゲットとしての）命題群、各命題のなかのサークル（○）は、先行詞と照応関係にある代名詞（Pro）に対応する。先行詞であるRとこれらの代名詞のサークルを結ぶ点線は、認知主体が照応的に両者が同一指示の関係にあると認識していることを示している<sup>8)</sup>。

{ $\varphi$ }\_i は代名詞（Pro）と同様、先行詞と照応関係にあることを示しており、「彼は」が省略されていることを表す。{ $\varphi$ }\_i が「彼は」の省略であることは、「政治家として知られている。」が、①単独の始発文としては成立しないこと、②「彼は」を補っても(00)の文章の中の一文として成立すること、という二つの理由からいえる。このように、連文における省略を証左する①②が、冒頭に挙げた話題化された1人称代名詞の場合は異なる。(1) Bは①単独の始発文として成立すること。また、②「私は」を補うと意味が異なる。このことから、3人称代名詞と1人称代名詞の性質の異なりがあまり出されているといえよう。

談話におけるこのような省略は、従来のテキスト言語学のアプローチでは「結束性」によって説明されることが多い。結束性とは、「ある文がその文だけでは解釈が完結しない要素を内包しているとき、その文は先行／後続する文（連続）に解釈を依存しており、そのことによってその文連続は全体でテキストを構成する。この場合、その文連続は「結束的 (cohesive)」であり、そのテキストには「結束性 (cohesion)」が存在する。」(庵2007: 10)と説明される。言語主体の事態解釈の観点から捉え直せば、この結束性を成立させるのが、言語主体が認識する照応関係の認知プロセスである。代名詞「彼は」の場合も、{ $\varphi$ }\_i の場合も、それぞれの表出は、言語主体がそこに照応関係を認知している解釈態度を反映しているのである。そして、ともに照応関係の認知を反映するものの、両者の相違は、言語主体が認識する結束性の強弱の差異を反映する。その差異は程度比較の問題であるが、言語主体が

その結束性の強さを強調しようとするれば  $\{(\rho)_i\}$  が表出し、弱く表そうとするれば「彼」が表出するのである。

### 3.2 1 人称代名詞の言語化・非言語化の意味

#### 3.2.1 グラウンディング

認知文法において、グラウンドという用語は、発話事態とその参与者（話し手と聞き手）、話し手と聞き手の相互作用、および、話し手と聞き手を取り巻く直接的な環境（とりわけ発話の時と場所）を意味する。話し手、聞き手は個別にまたは共同で概念化者として機能し、これら2者の相互作用がグラウンドを形成する（図2参照）。

グラウンドに言語表現を結びつけることをグラウンディングという。「グラウンディングとは、概念化の主体（subject）と客体（object）間の非対称性、すなわち概念化者と概念化されたものとの間に存在する非対称性を反映している。主体および客体の役割とは、概念化により生じる関係の2つの様相である。主体は概念化活動に携わり、概念経験の中心に位置している。しかしながら、主体としての役割においては、主体それ自身が知覚されることはない。主体としての活動の本質的な様相は、注意の方向づけである。意識化が可能となるスコープ領域で、主体はある領域——比喩的に述べるならば「オンステージ」領域——に意識を向け、そして注意の焦点として、オンステージ要素を選出する。最大限に限定的に述べるならば、選出されたオンステージ要素が概念化の客体である。認知状況が分離した結果、主体と客体はまったく別となり、主体は主体的に（subjectively）解釈され、客体は客体的に（objectively）解釈されることになる。」（Langacker *ibid*: 331）

客体的解釈と主体的解釈の相違を具体的な例で見てみよう。

(a) There is a clearing ahead of me.

(b) There is a clearing ahead.

（池上2000: 274）

「いずれの文も、森の中で、話者の前方に（木の伐採された）空き地があるという状況を叙述しているわけであるが、(a)では、話者はあたかも自分をも含んだ写真のなかの状況を見ているかのように、言わばその状況の外に立って客体的に捉えて報告しているという印象を与える。一方、(b)は、森を通過している話者が行く手前方に空き地があるのを認識して報告しているといった印象がするであろう。話者は、状況を対象化して客体化して捉えているのではなくて、自らの意識という場に投影された様相として主体的に捉えているわけである。つまり、(a)(b)を比較した場合、(a)は(b)に比べるとより客体的な解釈を反映し、(b)は(a)に比べるとより主体的な解釈を反映しているといえる。」（池上 *ibid*: 274）

以上からは、客体的解釈と主体的解釈の相違が、主体と客体の位置関係に起因していることが分かる。客体的に解釈するということは、概念化者が対象をオンステージに置くという

ことであるが、すなわち、それは意識上、遠く離れたところに存在すると認識することである。他方、主体的に解釈するということは、自分をとり込んでの事態解釈であるが、すなわち、それは概念化者が対象の存在を自己と心的に同じ位置に存在すると認識することである。つまり、主体的解釈、客体的解釈の問題は、概念化者が認識する対象が存在する位置に関する心的距離の問題であり、遠くに位置づければ客体的解釈となり、同位置に位置づければ主体的解釈となるのである。

### 3.2.2 1人称代名詞の構図

1人称代名詞「私」の言語化は、グラウンドにある対話者の1人が、プロフィールされて概念化者と概念対象の二重の役割を負うことを意味する。Langacker (2009) は、トラジェクターとして作用する1人称「私」の役割を、「大統領について考えていることを言いなさいと言われた場面での、同一内容ながら異なった2つの返答を(a)(b)とする。」という例文を挙げて、次のように説明している。

「図7(a)は、話し手である概念化者が、自己を焦点化し概念対象としてオンステージに置き、言語表現の客体的概念内容(C)としてプロフィールしていることを示している。あたかも他の人から見られているかのように、「私」をグラウンドの外に位置づけて記述しているのである。話し手(S)からトラジェクター(tr)に向けての矢印のない破線が、話し手がトラジェクターを同一であると認識していることを示している。したがって、このように概念化される「私」は、本来であれば、最大限の客体性をともなって解釈された客体であるといえる。しかしながら、グラウンドの参与者である話し手とオンステージの客体である「私」とが同一であることから、客体性に寄与する要因の1つであるグラウンドからの距離が存在しない。このことから、オンステージの客体でありながら、グラウンドに位置する概

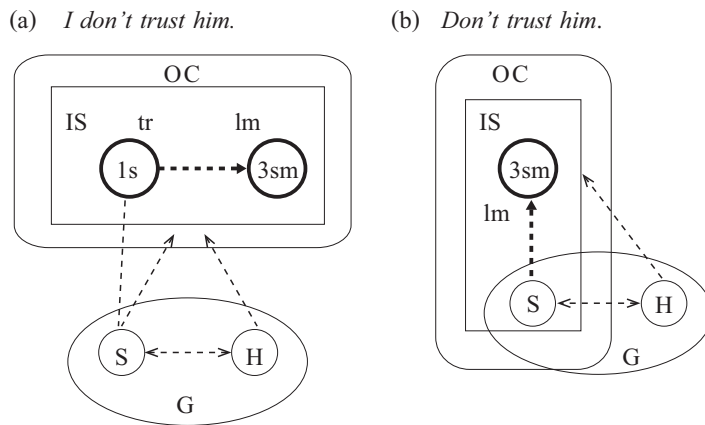


図7

(Langacker 2009: 468)

念化者にとって、「私」は十分には客体的でないとして解釈される。

このように、言語化された「私」が反映する解釈態度は、概念化の主体であると同時に客体でもあるという、話し手の二重の役割を明示的に示すことができる利点がある。しかし、その反面、オンステージの「私」がオフステージの観察者と同一であることから、主体、客体の関係の曖昧さをともなうことにもなる。」(ibid: 468) このことから、「1人称代名詞は、(観念的な分裂・移行を経た)知覚・認識者の視野の中に含まれる自己をその指示対象とする表現形式である。」(本多2005: 33) ことがいえる。

一方、図7(b)は、話し手が実際にそれを経験しているかのように概念内容を示そうとする表現である。「文法上の主語が省略されて言語化されているため、言語表現の客体的概念内容(OC)と直接スコープ(IS)との間に食い違いが生じてくる。記述された状況を示す客体概念内容では、動詞によってプロファイルされるプロセスのトラジェクターが、自分自身を取り込んで概念化されている。話し手が自分自身をオンステージに位置づけるのを避け、むしろ自分自身を提示させないかたちで概念化しているのである。グラウンディングの観点からいえば、この構図で表される言語表現は極めて強い主観性を反映しているといえる。」(ibid: 468)

(a)(b)の構図が示す共通性は、概念化者が対象を主体的に概念化する点にある。しかし、その主体性は強弱という点で異なる。(a)の場合、主体・客体の関係の曖昧性は否めないものの、(b)に較べれば、客体性が加味されている。しかし、この客体性も3人称が見せる客体解釈(3.1.1参照)と比較してみるとそのちがいは歴然としており、客体性の程度がはるかに弱いことは明白<sup>9)</sup>である。一方、(b)は極めて主体的な概念化を反映するものである。

### 3.2.3 客体的事態解釈と主体的事態解釈

認知図式図7を、話し手と1人称代名詞「私」の話題化との照応関係の観点から捉えると、(a)が反映する認知プロセスは次のように説明される。話し手は、自己を参照点として、自己と同一であると認識する対象を特定して参照点とし、ターゲットとして起動した領域において、その参照点と照応的に呼応する代名詞を含む命題群のなかの一つの命題を特定し、命題のトラジェクターとして位置づける。これを、照応関係からいえば、ここでは3人称の照応関係を反映する認知プロセスと同様の認知プロセスが作動しているのである。ただし、1人称が反映する参照点とターゲットの照応関係は、次の2点において3人称の照応関係を反映する認知プロセスとは異なる。1つは、3人称では参照点は概念化者が特定するある名詞句であるのに対して、1人称では参照点となるのは話し手である。もう1つは、1人称では、参照点と照応関係にある代名詞を、概念化者が自己と同一であると認識していることである。

例文(3) B 「私は、その本、早く読みたい。」は、(a)の構図がみせる客体的事態解釈を示

す認知プロセスを反映する。例文 (3) を再掲する。

(3) A: これ、この間、出た村上春樹。田中さんに貸してあげようと思ってるんだ。何か新しい本が読みたいって言ってたから。

B: 田中さん、読みたがるかなあ。だって、村上春樹、あまり好きじゃないって言ってたから。でも、私は、その本、早く読みたいなあ。

「私は、その本、早く読みたい」では、話し手である概念化者は「私」と「田中さん」との対比を企図している。そのため、最大限に客体性をともなって解釈された客体である「田中さん」と対比するためには、対比の対象となる「私」も最大限に客体性をともなって解釈された客体とする必要がある。そこで、概念化者はグラウンドにある自己を参照点とし、その参照点と照応関係にある代名詞を、オンステージに位置づけて特定する。その代名詞「私」が、特定された命題のトラジェクターとして作用するのである。このような認知プロセスからは、言語化された「私は」は、自分自身のことでありながら、意識のうえから言えば、客体的に解釈した客体として認識していることが示される。とはいえ、概念化者と客体である「私」とのあいだに距離が存在しないため、その客体性が曖昧なものになっていることは、これまで述べてきたとおりである。

一方、図 7 (b) の場合は、概念化者である話し手は確かに存在しているが、表立っては姿を表していない。ランドマーク「その本」が節のトラジェクターとして焦点化され、「その本」と概念化者との関係性を示す動的心的態度「早く読みたい」が言語化されている。つまり、概念化者がランドマークとなり、もともとのランドマークがトラジェクターとなっているのであり、ここでは、トラジェクターとランドマークの関係性が反転しているのである。

例文 (1) B 「その本、早く読みたい。」は (b) の構図が示す主体的事態解釈プロセスを反映する。(1) を再掲する。

(1) A: 3年ぶりに村上春樹の新作がでるんだって。前評判、凄いいよ。

B: その本、早く読みたいなあ。

「その本、早く読みたい。」では、話し手がランドマークと化し、概念内容をトラジェクターとして焦点化して言語化しているという認知構図である。このような構図は、話し手が実際にそれを経験しているとして事態を把握している態度を反映するものであり、極めて主体的な事態解釈態度<sup>10)</sup>を反映している。話題化された「私は」がランドマークとして作用する構図では、先行詞が存在しないわけであるから照応関係は成立しない。したがって、(1) B 「その本、早く読みたい。」において、話題化された「私は」が言語化されていない現象を、そこに「私は」が〈省略〉されているとみなすのは不適切である。話題化された「私は」が言語化されない場合は、「私は」はトラジェクターからランドマークへ反転して作用し、概念化者が事態を主観的に解釈するという認知プロセスを反映しているのである。

以上から、話題化された「私は」の言語化・非言語化の非対称は、言語主体が事態を客体的に解釈するか、主体的に解釈するかという事態解釈の非対称を反映するものであることがいえる。

## 4 結語

言語化・非言語化の非対称は認知的「際立ち」の問題である。言語化された代名詞は、非言語化された代名詞との関係において、相対的に際立っている。従来の言語研究では、相対的に際立ちの弱い非言語化された代名詞は、3人称であれ、1人称であれ、その役割を〈省略〉の一言で片付けている。しかしながら、認知的際立ちが見せる本質的な相違は、その非対称性を見せる現象において、際立ちがどのような重要な役割を果たすかを明らかにすることによって初めて示されるものである。このような、認知言語学のアプローチのもと、本稿では、言語主体の事態解釈の観点から考察することにより、話題化された「私は」の言語化・非言語化の非対称性が、事態を客体的に解釈するか、主体的に解釈するかという、言語主体の事態解釈態度の認知プロセスの非対称性の反映であることを説明した。

## 注

- 1) ここでいう「認知」は、「知覚や身体経験に根ざしており、他の能力から独立しているのではない。社会的な相互作用によって、心は刺激を受け発達していくため、習得された能力や知識は、社会文化的な環境にきわめて順応していく。」(Langacker 2008) と解釈されるものである。
- 2) 「人間が起こす出来事であれ、語や文であれ、意味とはつねに、ある人物ないし共同体にとっての意味である。語そのものは意味を持たない。語が意味を持つのは、語を用いて何ごとかを意味しようとする人々にとってだけである。要するに、言葉の意味は、ある個人もしくは共同体が、その共同体によってあることを意味するために、言葉を使用することに基づいている。」(Jhonson 1987: 177)
- 3) 「外部世界の知覚には、主体の主観的な認知プロセスがかかわっている。主観的な認知プロセスのなかでも、とくにゲシュタルト知覚にかかわる認知プロセスは、形式と意味の関係から成る日常言語の記号系のメカニズムを明らかにしていく際に重要な役割をになう。この種の認知プロセスは、心理学の分野（とくにゲシュタルト心理学の分野）において明らかにされてきた認知プロセスである。ゲシュタルト心理学の中心的概念であるゲシュタルト (Gestalt) は、全体が部分の総和からは単純に予測できない有機的な構成体として規定される。」(山梨2008: 13)
- 4) 「前景」「背景」という用語は、本来、視覚や空間を表す際に使用されるが、ここで問題となっているのは認知プロセスにおける非対称性を意味する。
- 5) ある関係がプロフィールされると、程度も多様なさまざまな際立ちが、関係性を有する参与者

## 1 人称代名詞の言語化・非言語化の意味

に与えられる。最も際立っている参加者は、トラジェクターと呼ばれ、ある場に位置づけられたり、評価されたり、記述される対象として解釈される。トラジェクターは、プロフィール関係に第一の最も重要な頂点と規定される。ほかの参加者は2番目に際立っている焦点となり、これはランドマークと呼ばれる。

- 6) 「「鈴木先生<sub>i</sub>は自分<sub>i</sub>の学生に推薦状を書いてあげた。」のように、「彼」の代わりに「自分」を使うことも可能である。これらのいずれの表現が適切であるかは、その話し手（ないしは書き手）の視点に左右される。この場合、「自分」が使われる場合には、話し手（ないしは書き手）が先行詞の主語（「鈴木先生」）の視点からみている用法である。これに対し「彼」が使われる場合には、この種の視点の投影はみられない。」（山梨 *ibid*: 114）
- 7) 「話というものは、その最も広い意味において、すなわち話し手と聞き手とを想定し、しかも前者においてなんらかの仕方では後に影響を与えようとする意図のある言表行為として理解される必要がある。」（バンヴェニスト 1983: 223）
- 8) 「日本語では、原則として、「彼／彼女」は、対話の始まる前にすでに話し手・聴き手の知識の中で確立している対象、あるいは、実際の現場に存在する対象しか指すことができない。」（田窪・木村 1992: 137）という指摘があり、また、『大辞林』（第三版）では「かれ【彼】：3人称。話し手・聞き手以外の男性を指す。明治以降、英語の *he* などの訳語として生じたものであるが、日本語では同輩以下のものをさすのが普通。」という説明があるように、先行詞と「彼」との照応関係の成立には課せられる制限が存在する。
- 9) 「主体、客体の問題は両極ではなく、程度の差である。」（Langacker 1991）
- 10) このようなランドマーク化した「私は」について、本多（2005）では、‘I’ve got a pain in my stomach.’／「胃が痛む。」、‘I found it.’／「あったぞ。」といった英語表現と対照させ、「英語は状況を外部から見て表現する傾向が比較的強いのに対して、日本語は状況の中において、その現場を見えたまま表現する傾向が強い。」（*ibid*: 155）と述べている。日本語が好む事態解釈態度といえよう。

## 引用文献

- 庵功雄. 2007. 『日本語におけるテキストの結束性の研究』くろしお出版
- 池上嘉彦. 2000. 『「日本語論」への招待』講談社
- バンヴェニスト・エミール（岸本通夫他訳）. 1983. 『一般言語学の諸問題』みすず書房
- 本多啓. 2005. 『アフォーダンスの認知意味論：生態心理学から見た文法現象』東京大学出版会
- 山梨正明. 2004. 『ことばの認知空間』開拓社
- \_\_\_\_\_. 2009. 『認知構文論』大修館書店
- Johnson, Mark. 1987. *The Body in the Mind: The Bodily Basis of Meaning, Imagination and Reason*. The University of Chicago Press, Chicago and London. (『心のなかの身体——想像力へのパラダイム転換』菅野盾樹他訳, 紀伊國屋書店, 1991)
- Langacker, Roald W. 1993. Reference-point construction. *Cognitive Linguistics* 4(1): 1–38
- \_\_\_\_\_. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford University Press